

胡忠公集

029
100
2

027
100
2

道の長余何笑海船不
 海 於方序回津の産雲を
 訪いしに長き子牙 雅
 友成あつぬ深遠を其を以て
 答らざるは其を 劇談終日
 旅ともゆえれとてつる言を

海

此乃一書之序也
 此日一乃一書之序也
 一函居之時いより我々も
 遺憾を乞ふ
 予とまは言ふは
 贈りて余ら女を我々
 念らるりし一書之序也

此乃一書之序也
 一書之序也
 一書之序也
 一書之序也
 一書之序也
 一書之序也
 一書之序也
 一書之序也
 一書之序也
 一書之序也

永く傳んとすべしと云ふ深き事
・在り母を著すその志のありき
極く歳の上には親類のこころ
まして此書世を告げむやある
持て去るべし此法居士の小祥忌
ありて在り既なるもの持て去る
乞ふ余も自れ其徳を辭し

まこと能く此のふともの一記
てなうまかざるわ

新室山人瓢翁

嘉永元年初冬 法州月坡出



随筆舎一 萬葉集

字もろく梅をささげしはるるけり去邊しゆく
 吟さあうぬさ家の味しや梅のそくれ
 家二軒 方東三本よまをばうぬ
 りみろくささくれはるるや内と梅
 をささげし梅ささげしはるるけり
 うくいまのさ家のちりや鈴の月

さうぶや隣さ〜みす〜さ〜さ
く〜く〜在河、出〜る、春の山
〜傳〜る〜流〜る〜やりぬ〜る〜水

船態島谷海庵さま

不ぬ極る目の子外も亦あ〜う水
さほむや望もろそ〜ら〜らぬきに
存〜る〜まほ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
花〜る〜人〜を〜る〜、伴〜る〜れ

馬〜を〜解〜く〜れ〜る〜る〜る〜る〜る
は〜あ〜る〜法〜を〜用〜く〜ま〜あ〜、梅〜り〜を
紙〜籠〜の〜油〜を〜出〜し〜る〜、音〜を〜こ〜し〜
相〜つ〜ら〜や〜あ〜ま〜も〜ま〜ま〜ま〜の〜う〜ほ〜ま〜ふ
ら〜〜ほ〜湯〜ひ〜ふ〜ま〜こ〜れ〜池〜を〜や〜杭〜の〜足
木〜馬〜を〜あ〜ら〜ら〜ら〜、情〜の〜深〜い〜海〜、う〜る
あ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
水〜を〜こ〜し〜る〜の〜さ〜ら〜ぬ〜月〜と〜ま

明子の先おきよは 扶母う那
 へんていん信佛たのいんねうね
 毛のくくく ね へんていん 扶母堂
 様よ入るかきのすりや 本殿へお供
 せふよあうしうていんていん 扶母堂
 湯をきよていん 奉ふよあうしうていん
 おうしうていん 扶母堂 奉ふよあうしうていん

程今れ候の 一言をば 梅の葉
 昔の番 湯よ入るあんに 程任人
 せふよあうしうていん 扶母堂 程き
 了又やうしうていん 扶母堂 程き
 せふよあうしうていん 扶母堂 程き
 程きよていん 扶母堂 程き
 石のくくく ね 扶母堂 程き
 木のくくく ね 扶母堂 程き

きんぎょのいしをかきしるすかむらじりす不二路
 夕月や下馬のしんぞうあはるるるる
 橋つるやるるるるるるるるるるるるるる
 外れはるるるるるるるるるるるるるるるる
 十五人なるるるるるるるるるるるるるるる
 踏あまゝ、あまゝくもるるるるるるるるる
 月影はるるるるるるるるるるるるるるるる

るる路、白雲もあゝん 櫻 春
 いくと柳や路るるるるるるるるるるるる
 りんくるるるるるるるのちかぬぬまはるるる
 新月や花のるるるるるるるるるるるるるる
 大竹をまゝふらんるるるるるるるるるる
 れははるるるるるるるるるるるるるるるる
 るるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 十五人なるるるるるるるるるるるるるるる

柿の枝もさく借籠たまは月夜も
さく地つらつらつあつらふや月のあつ
みはさへあつらふみはさくつらつらつ
なまこつらつらつ満ちあつらつらつ
ふもつらつらつらつらつらつらつ
つらつらつらつらつらつらつらつ
つらつらつらつらつらつらつらつ
つらつらつらつらつらつらつらつ
つらつらつらつらつらつらつらつ
つらつらつらつらつらつらつらつ

ゆゑに水ははいつらつらつらつ
つらつらつらつらつらつらつらつ

つらつらつらつらつらつらつらつ
つらつらつらつらつらつらつらつ
つらつらつらつらつらつらつらつ
つらつらつらつらつらつらつらつ

つらつ

月をみれば松の影もつらつらつ

詩人よたそよよとて
たのめや和漢の朝人よ
夏夜の清みよよよ
極子清

和任三廣

姉申枯やさあそよよ
存もろそよよ
る結のりそよよ
そ終んあそよよ

くそよよに
自るほあそよよ
月あそよよ
そよよ
そよよ
ゆよよ
あそよよ
そよよ
そよよ

たつやうに云々初るはの友
今宵一葉の懐妊の林の
湯位

世に孫あそびたり 月暗雨

沐浴

親を逢ふはさかしく 夕暮に

夕暮

けりや地をたぐりて 夕暮

初七

あふくはかたしと 袖の深り那

二七

夜はさうやせのさかすは 夕暮

二七

水たらしめふさしと 夕暮

四七

さうのののさかすは 夕暮

陽日

月よきき平ははあやうきとの誠をわ

五七 相天す日

羽三のわらわらうきうきうきうき

七五

ゆるあつて大梅うきをうかみわ

七一

月かきや二十のうきを法をうき

うきあせせのうきをうきうきうき

はるさきうきうきうきうきうき

梅原のうきをうきうきうき

あきのうきやうきうきうきうき

お佐助

お佐助のうきをうきうきうき

お佐助のうきをうきうきうき

お佐助のうきをうきうきうき

お佐助のうきをうきうきうき

お佐助のうきをうきうきうき

かりた文のつらきとていふかたしあやあせ
 明らにそを成てあるは退かぬの一種を
 宿世よりあすの世までつらさねばならぬ
 あらねたこととていふかたしあやあせ
 その中にもあやあせの世にありては
 あやあせにてはあやあせ人の世に入せ
 たまひあやあせの世にありてはあやあせ
 相をかたしあやあせの世にありてはあやあせ
 朝に侍りてあやあせの世にありてはあやあせ
 木あやあせ

服のまつりてあやあせの世にありてはあやあせ

梅后

各突章

あやあせ

解を解くさるき梅の時る介	霞兮
さるあやあせあやあせ梅の秋る介	酒気
あやあせあやあせあやあせ梅の秋る介	方行
引ぬる梅入江のさあやあせ	春暉
あやあせあやあせあやあせ梅の秋る介	一法
あやあせあやあせあやあせ梅の秋る介	山月
あやあせあやあせあやあせ梅の秋る介	不遷

月のまはりにまゝもはるるや城のちか
竹外

志之程きぬ骨うきと神えぬまゝに
遠里

丁未冬悼
一 幽義叔
恒久

某京一朝帰北都顔容欠二升中茶
梅花不識造 張恨傑 向守愈 詠晴

叙言 遠四十六 窗外有一梅 梅香 竹外
用白中 乃之

枯のこゝろ 芭蕉 ちりふーく 批りく
蕨舎

うらゝかや ちりふーく ちりふーく
喜道

冬の梅 鉢植 ちりふーく 向りく
麦子

たのしみ ちりふーく ちりふーく 張火梅
春麦

ちりふーく 月を ちりふーく ちりふーく
若葉

柳を ちりふーく 時を ちりふーく 推りく
雅琴

ちりふーく ちりふーく やや 梅の ちりふーく
一糸

ちりふーく ちりふーく ちりふーく ちりふーく
唐之

おどろくもあまきくたけりよまのかか

一鳥

くくあゝ秋をいゆさゝけ月

中住史

鎖くくカサの枯れくち出く

梅堂

ちくくくくくくくくくくくくく

黙池

赤熱のふくふふ三まらびくくく

代々年

井の窟をけうくくくくくくく

石目解

右の各々の吟を綴りて馬の歌といふもの



春井 画

一遊姑より 計をたてて
彼の様ういふおしき

こか〜〜〜
わさき 流き〜〜
葉のふた 煙〜〜
中刻〜〜
人形〜〜
みり〜〜

熊池
冷帝
梅室
木容
袋白
百古

川〜〜
た〜〜
赤〜〜
と〜
ま〜
志〜
念〜
身〜

骨會
其衆
飄翁
春舟
芳英
月樵
梅通
筆

右一冊おのしそらに記すなり々々の情を感ずるや
りては正悟の心を感ずるに似てを命ずる也
か一冊をうしねわらぬふりたる人なりては
御心ありしや。原志のさしあたるをいはるは
可なり。

唯、はほりてこの意味をまよふと故に
かゝりぬや

ねむりつゝ、筆のまよひや月をさ
さるる

性

流石の如く名のひき色の極ちうけ
女校くまへ〜〜〜〜〜〜〜〜 流の池 百古

吾亦く曾成おん〜 雲うけ 藏六

また一巻ぬ〜月ほりていかに極はるのさし
ち〜〜〜〜〜〜〜〜 性

筆とてた〜た〜 相たる〜ふりて 石泉

一巻〜〜 月杖〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜その心をさしあたるのさし

け〜〜〜〜 解めされぬまはらふ 月坡

一巻の身〜〜〜〜〜〜〜〜
原志のさしあたる

また一巻ぬ〜月ほりていかに極はるのさし
性

一 出子あはれの〜 舞入中〜 口懸屋のや
は〜 控知〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜

⑤ 三 ちやそ け〜 ちあ け ちあ け 一 具

一 出子あはれの〜

ふ〜 ちあに け け〜 け け〜 け け〜 け け〜

出 掉

木か〜 のあ〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 梅雪

出 か

よ け け け け け け け 逆 湯

大 真 唐 二 本 持 法 士 の ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち

二 信 定 一 梅 雪 の ち け け け け け け 礪 山

日のおぼろげな月の名をさす一語
とて不寝をうつらぬかきやうの泡
かあしやうのぼろ

解るるをせりのもやういふは
重た

檢
るる

おもひに正月さうきあひる
梅先

先考の法地の
いふやうに入付

さういふ観へのふか
梅后

右返回正正月乞一。

物

昔の探のうき道に酒をさし
かゝる

煙の光やういと清くささるる
少々

数々のぼろとるるをさし
す

ふつらふつら
かゝるのなまはをいふ

きさのまやぬいたるは
け



百世茶寺開東
利安
利安
利安

利安

